

週寫眞
報

編輯局報情
ノセ十號三十四百二第日一廿月十

昭和十一年十月十一日 星期二 第2430號 每份十錢 零售每份十錢 廣告費另議 印刷所 東京印刷局

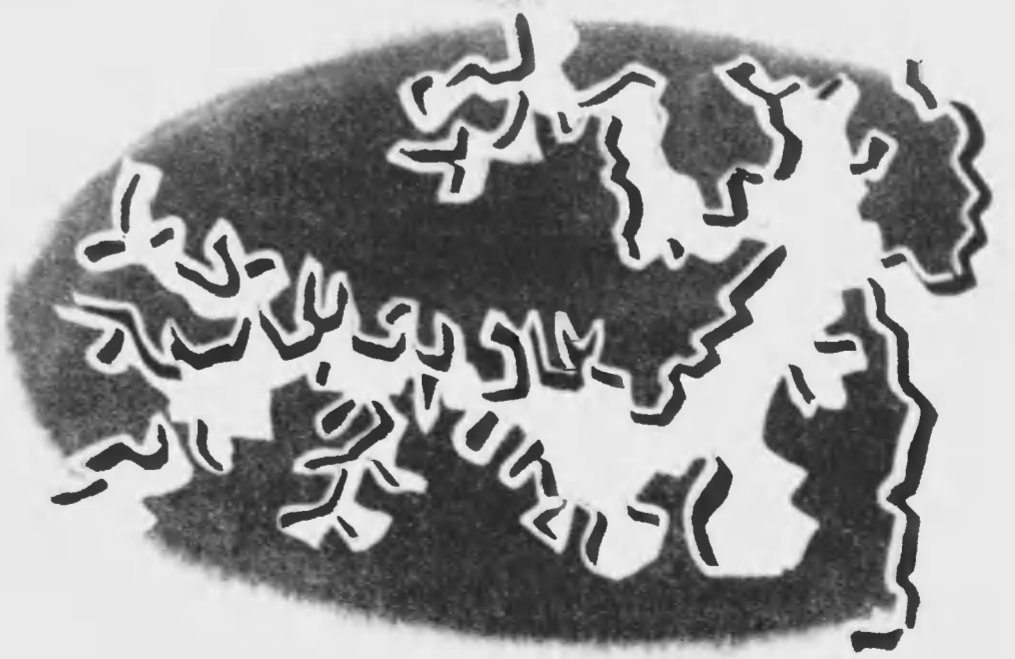




シドニー灣強襲の
特別攻撃隊英靈祖國に還る

同勇士の遺骨を載せて
水葬せしめられた、いま
復讐に入隊した

命おのれのものならず
一^びヒをのみて
われにつづけと
碧海の底に
訓^{をし}へたまへり
命おのれのものならず





の襲強海一ニドシ
ふ迎を靈英隊撃別特

四柱の遺骨は重々と斬を
泳りも
遺骨や遺友に護られて
昔は可哀うな火れてお
へ申上げる海軍少年團の
前をしづくと進む



南洋シドニー要港に奇襲を敢行、壯麗なる散華を遂げた帝國海軍特別攻撃隊四勇士海軍大尉中島愛四氏、海軍大尉松尾敏雄氏、一等兵曹大森猛氏、二等兵曹都竹正雄氏（離隊はいづれも戦死當時のまま）の遺骨は十月九日米明横濱入港の日英交機船會九で、國民の敬虔な感謝と哀悼のうちに無言の歸還をした

去る五月三十一日、特別攻撃隊は折柄敵々たる月明下、しかもシドニー港の外港であるジャクソン港の嚴重な哨戒網を潜つて在泊中の敵艦一隻を撃沈した壯舉は、インド洋の凶端マダガスカル島ディエゴ・スアレスを急襲した特別攻撃隊と日時を同じくしてゐただけに、當時南洋をはじめあらゆる敵陣營を恐怖と不安のどん底に陥れたのである。連日相フォードが「日本海軍は南洋の心臓深く刺し込んで来た」と絶叫をあげた散華を行つたことは想像に餘りがある。しかし恐怖のどん底に叩き込まれた彼等ではあるが、彼等はその後が特別攻撃隊四勇士の遺骸を引上げ、懇な海軍葬を営んだのである

われは戦ひと同時に非武装のわが属民に侮辱虐待の態度をとつた非人道な彼等が、敢へてとつた今回の散華は、恐怖のうちにわが特別攻撃隊の國境を越えた勇士に對するひそかな復讐の念の現はれであらうと思はれる。しかしまた、わが四勇士の勇猛心を讃へることによつて彼等は沈滞した自國國民を引き締め、士氣を鼓舞する具に供したとも見られるのである。だがわれは南洋のこのつた雄姿が如何やうに解されようとも、決してこれによつて戦争目的は達成だもしない。われはあくまで米英を撃退するために、シドニー灣頭に散つた特別攻撃隊の遺骸を受け継ぎ、いよゝ書ひ起たねばならない

一位國民、敵か四勇士の勇猛無比の魂に泣かないものがあらうか……



よくぞやつたと譽を浴びる遺族の方たち

に先の鼻を島群ンモロソ



島の鼻に船が来て何を語る... 〇〇〇島の風景

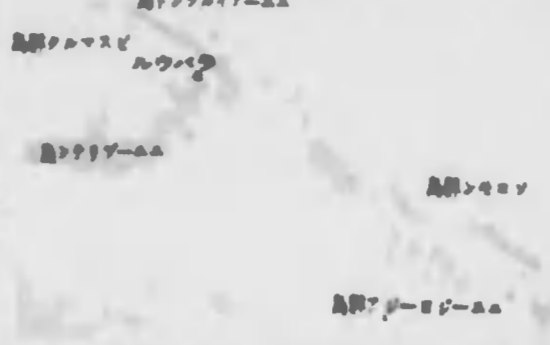


バナナ、パイナップルなどを原住民たちにはラバウルの街に渡りこく 撮影 佐野海軍報道員

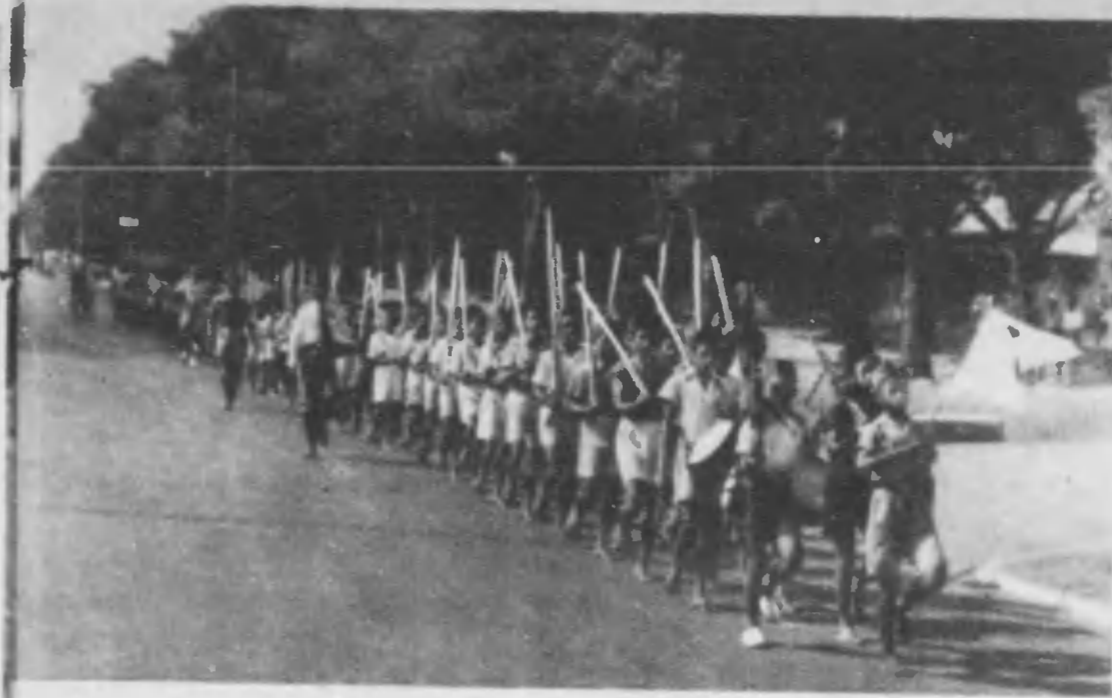
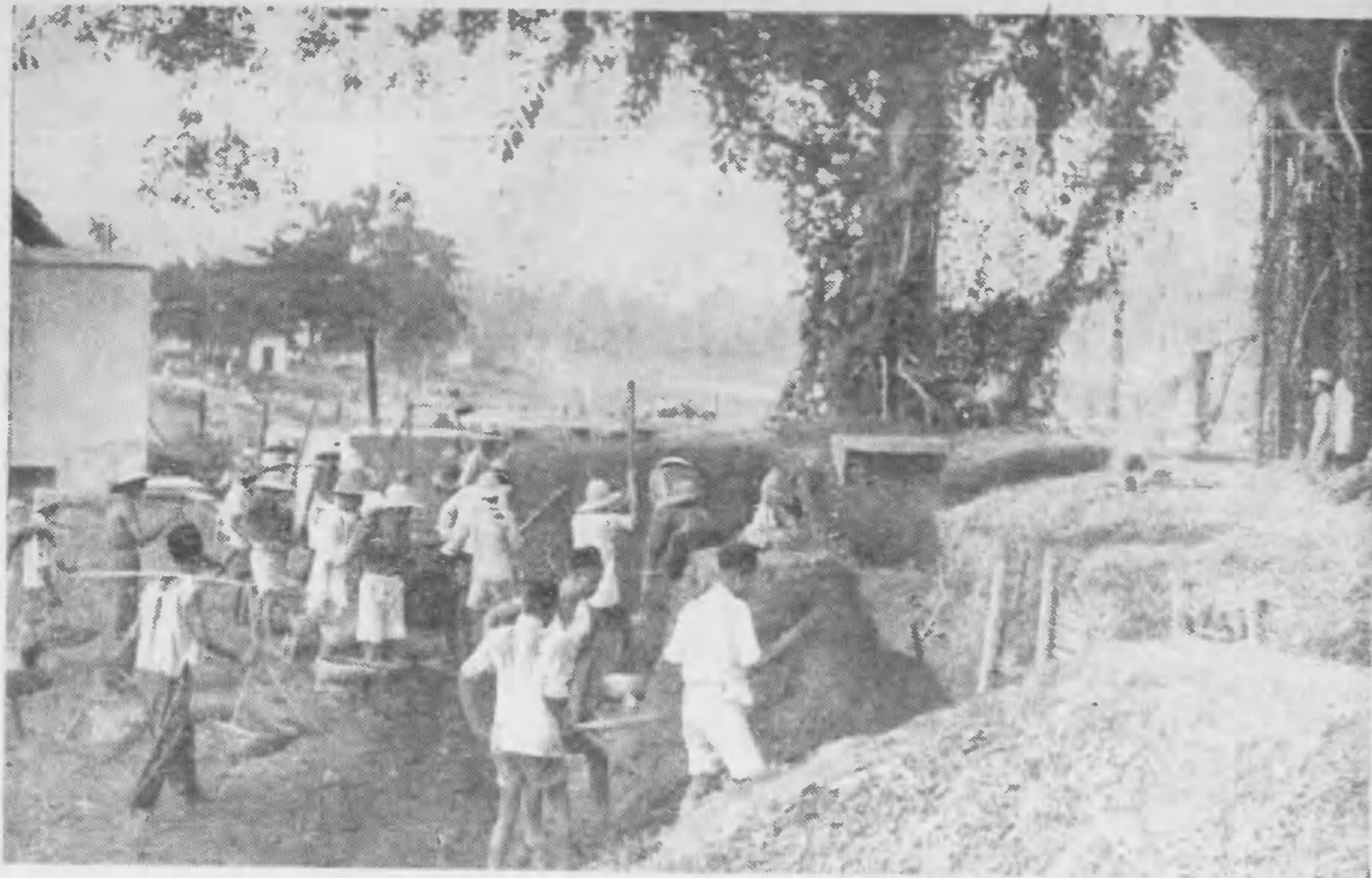


戦文に見送られて二輪〇〇へ 砲撃隊は出撃する
ニューブリテン島は火山島だけに住民は 豊穡である。砲撃を洗った砲撃隊員

のルウバが我々 悠々地



ニューブリテン島に軍艦隊が襲へ
つてから九月、首都ラバウルは見
違へるやうに復興した。公園の街と
いはれるラバウルには毎朝郊外から
原住民がヤゴン、コウ、トマト、そ
れに豚、鶏など各種の肉の串をぶら
下げて殺戮し、彼らの唯一の嗜好品
である「ココナツ」を煮つけて焼いてゆ
く。またこの街を歩くと、美しいやうに
美しいインゴを焼いて串を刺すやうに
来る風流な風景も見られる
だが、ここに駐屯するわが海軍第
隊は、日下作戦進行中のソコモン群
島とは月と鼻の間であり、ニューブ
リテンの東端にラバウルとレスビーヤ
などの敵地に近接するだけに、そ
の緊張は一日と活まつてゐる

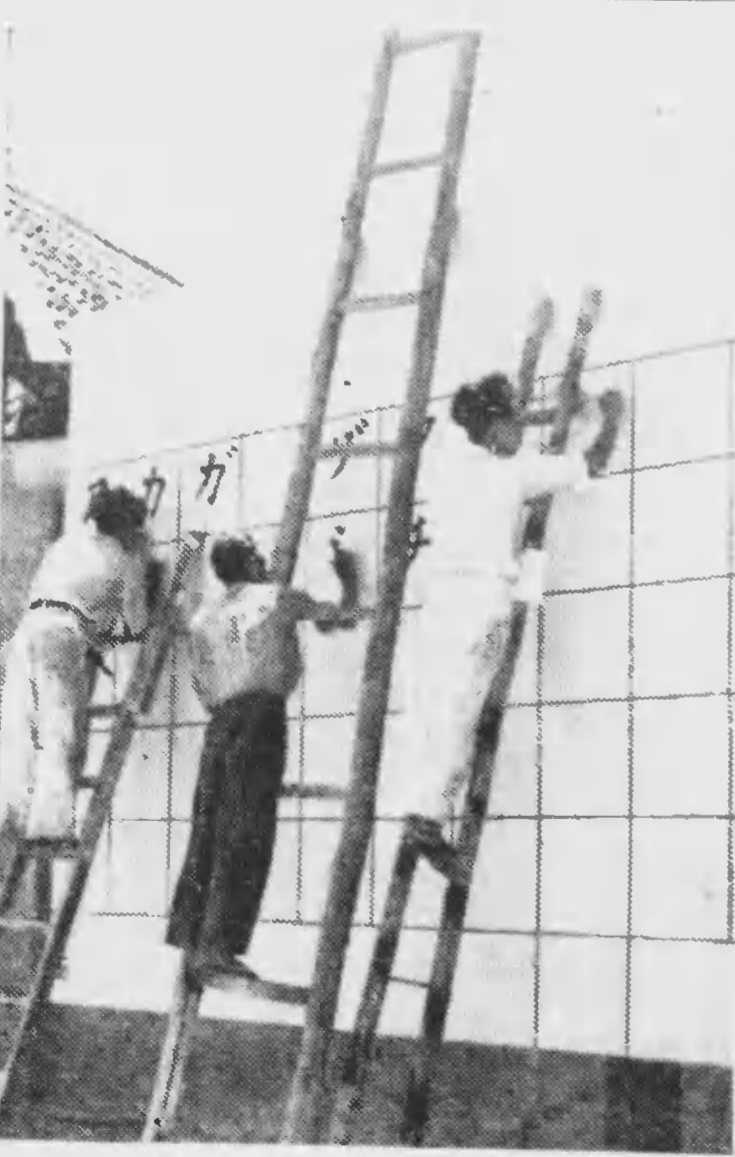


子供たちの民族ごっこ。これもジャワの新しい風だ。日本の軍歌を歌ひ、兵隊さんにならば必ず「頭右ツ」兵隊さんも立止



ジャワは南の樂園だといはれてゐる。だが、蘭印時代のジャワは蘭、英、米人らにはこの上ない樂園に違ひなかつたらうが原住民たちは樂園どころではなかつた。悪政に去勢された原住民が、吾樂さうにその日暮しをしてゐる際には、地獄の相がかくされてゐた。マラリア、ペスト、瘧疾など恐ろしい風土病が多いにも拘はらず、取立てていふほどの衛生設備もなく、また凡ゆる文化からは意地悪く遠ざかれて……だが今や、ジャワもアジアに違つた。皇軍の治下にある新生ジャワ、これこそ本當に南の樂園だ

このほど、ハタヴィアでは蘭軍がオランダに降参してから三年振りには、パッサル・マラム(島の市)が開かれ、連日押すなくの盛況だつた。ハタヴィアの蘭印軍が第一番につくつたトーチカの取壊し作業に一生懸命な原住民



「アイウエオ」は原住民のお馴染みだ。スラバヤでは、市民の啓蒙に



スラバヤにはこのほど種痘化清消毒隊が誕生して、その威容を誇つてゐる



二人の米兵

第二一〇一 藤芳郎

氏名がわの略攻一ドヒレ



「バタン半島が着ても二十日ばかり経つてからいよいよコレヒドール要塞攻めが始まりました。熱病と嘔吐に苦しみまわされたマリアレス軍港九百高地の陣地を撤収した私等の部隊は、カブカン飛行場の西の、谷間の狭い田圃に暫らく陣地を敷いた。五月二日である。

瀬河所は放銃の右前方五百メートルばかりの高地に定められた。低い木に蔽はれたその高地は、なだらかな斜面をコレヒドールにむき出しにしてゐるため、観測所

「この高地に私等は特別念を入れねばならなかつた。

「観測所のある山頂を、南側な川がめくつてゐる。そのほとり、私等の小隊は炊事場を敷いた。私等は半日、一日交代でこの高地に陣取りを任された。

「コレヒドール要塞は最もむづかしい意志の表へをみせてゐた。バタンと同じやうに、その常備は銃の故障はコレヒドールの方が私等よりきまつて三十分は早かつた。島の右端の「C」レーンに、毎朝のやうにその三

「二人とも早く起き上がった。

「二人は二つの毛布をくくりつけて手に持ち、一組の食器を腰にぶら下げてゐるほかは何も持たなかつた。私等は彼の陣りを反撃に備へた。早く朝食した。私等は二人を敵軍の使徒にすることに決めた。

「いま、いまだと聞き、さう思つて出てきたのか。

「二人とも早く起き上がった。

「二人は二つの毛布をくくりつけて手に持ち、一組の食器を腰にぶら下げてゐるほかは何も持たなかつた。私等は彼の陣りを反撃に備へた。早く朝食した。私等は二人を敵軍の使徒にすることに決めた。

「いま、いまだと聞き、さう思つて出てきたのか。

「二人とも早く起き上がった。

「二人は二つの毛布をくくりつけて手に持ち、一組の食器を腰にぶら下げてゐるほかは何も持たなかつた。私等は彼の陣りを反撃に備へた。早く朝食した。私等は二人を敵軍の使徒にすることに決めた。

「いま、いまだと聞き、さう思つて出てきたのか。

「二人とも早く起き上がった。

「二人は二つの毛布をくくりつけて手に持ち、一組の食器を腰にぶら下げてゐるほかは何も持たなかつた。私等は彼の陣りを反撃に備へた。早く朝食した。私等は二人を敵軍の使徒にすることに決めた。

「いま、いまだと聞き、さう思つて出てきたのか。

「二人は早く、奥野上等兵の顔を見つめてゐたが、その顔に急に色気のみまぎつた。

「『ありがたい、四時迄には作り終るやうに二人で努力する』

「太郎が答へた。二人は、私等の寝床の直ぐ脇の地ならしに取りかゝつた。二人は妙に活気づいて、寝床の裏さについて小さな音ひひ合ひをしながら、ひどく熱心に仕事を続けた。奥野上等兵の言葉から彼等が何を感ぜようとしたか、私にはよくわかつた。鋭い停風の感受性は、その瞬間救はれた、と感じたに違ひないのである。そのはずとした悦び、安堵を内にかくすこともないで、いそいそと寝床を作りにかゝる二人は私に現金な奴だと思ひ、単純な現金さがまた深くあはれであつた。

「炊事場の附近を、毎日丸腰で汚れた服の米飯を運ぶがうろ／＼した。彼等も矢張り太郎や次郎の如く、コレヒドールの反撃力を信じ、援軍到来の夢を懐いて、二十日以上も山の中に隠れてゐた連中であつた。しかも、日本軍の光榮してゐるあたりに衣を現はして、青臭いマンゴの皮などを平気でたき落してゐるのは、食糧の缺乏からでは無論なく、毎日の物凄いの爆撃もに、コレヒドールの命が最早幾ばくもないことを静かに悟つたからであらう。彼等は降伏しようと思つて日本軍の真中に委をあらはしたのである。

「ところで、私等のコレヒドール攻めの時

「期は目前に迫つてゐた。比島攻めの後となるであらうこの一戦を前にして、私等は激しい土氣の昂揚を感じ、胸がうづいて夜も眠れぬ程興奮してゐた。私等の熱情と決心とは、コレヒドール攻めの一戦にむか

「つて集中されてゐた。敗走兵がうろ／＼してゐるやうが、私等は氣にもとめなかつた。降伏を決心した後のアメリカ兵が、最早や何事もなげない鳥谷の徒衆であることを私等は知つてゐた。降伏者を保護することは勝利者の道義であらう。しかしそれは降伏者の命まで奪ひ去るの道義に對しての道義である。アメリカ兵に降伏者の深さがあらうか。彼等を保護せず、バタンの山野に突き放して置いて、決して自らの命を断つておかないのだ。華や村の實を食つても、降伏者となつた以上はその安易さに甘えて生き延びてゆくであらう。降伏したアメリカ兵も、太郎にも次郎にも勿論それがあつた。私等も最も卑劣な人間の弱點を見かゝることに出来なかつた。

「炊事場の附近をうろ／＼する米兵は、時々太郎や次郎の姿をみかけて、炊事場にやつてくるものがあつた。大抵よくよく腹を空かしてゐた。私等は彼等に「腹を食はして呉れるのだ」と言つてやつた。彼等は素直に歸つていつた。彼等は最早や自分が降伏者としてさへ認められてゐない、そして單なる路傍の乞食程度のあはれみかゝ施されてゐないことを感じてゐるに違ひなかつた。

「或る日、我を求めにきた三人の米兵が、炊事場にあらはれた。いづれも六尺器かの大男で、下士官級の階級であるらしいことは、三十を過ぎてゐると思はれる年配の落着いた物腰からも察せられた。

「彼等は例によつて口をあけ腹を押へて、大仰に空腹を訴へた。呉れた血の飯を食ひ終ると、中の人一人が、自分達を足非使つてくれ、と言ひ始めた。私等は

「マイに行け、と言つた。しかし彼等は首を横に振り、動かさなかつた。もう一度同じことを言ふと、一人が

「『自分等三人を自動車に乗せてリマイ迄連れて行つて呉れ』

「歩いて行つても峠方には到着することが出来ぬ。自動車は隊長の許可がなければ動かせぬ。そんなことは今は不可能だ。私等は答へた。

「彼等は静かに困惑し、暫らくだまつてゐたが、やがて一人が非常な努力を顔にあらはしながら言つた

「『自分等三人は降伏者である。武器も何も持たない。降伏者は寛大に取扱つて貰ひたい。』

「私と彼の言葉にかなた抵抗の色を讀みとつた。降伏者としては保護を要求する権利がある、といふアメリカ式の精神がつかつた。彼等は我にいそむのであらう。

「『おい、いま何んて言つたんだ、いま』

「注本上等兵などはむかつかつ腹を立てて危く彼等を押さへてゐたところだつた。

「五月五日の夜半、コレヒドールへの私達砲兵の最後の砲撃が行はれた直後、歩兵部隊は敵前上陸を敢行した。上陸は見事に成功した。炊事場には、三人の兵隊だけを殘して、私等は全部観測所に詰めかけてゐた。夜、びて、激烈な攻防戦が行はれた。

「コレヒドール島に白旗の掲げられたのは翌六日の正午であつた。カパロにもフライにも女々に白旗があつた。眼鏡にのみくついて、私等は感激を押しきれず泣いてゐた。

「話を聞くと、敵將ウェンライトは上陸部隊のところに来て投降を乞ふたが、我方は全面的降伏を許さないと、敵將

「『我々は二人に新しく名前をつけたい。昔の高い方を太郎、背の低い方には次郎、と』

「これからはお前等を太郎、次郎と呼ぶことにする。自分の名前を呼ばれたら、はい、と大聲の、よい返事をする。二人ともわかつたか。』

「よくわかつた、自分等の名前は太郎、次郎である。」

「二人ともよくこまめに働いた。

「太郎は次郎よりも三つ年上の二十六で、どこか性格の弱さが窺へる神経質な顔をしてゐた。次郎は五尺三寸位、顔に赤いきびがあり、下半分は荒い顔に埋まつてゐた。彼等は薪を拾つてきて細かく割つたり、食器を洗つたり、水を汲んだり、殆んど小やみなく立働いた。半身裸體の彼等の汗が汗でだら／＼光つた。次郎は毛の生えた手の甲で鼻の頭を流れる汗を無難作にすくひあげたりした。仕事がなくなくなると彼等は直ぐに奥野上等兵の側へ来て、仕事を全部完了した、直ぐにはかの仕事を與へてくれ、と言つた。

「彼れたらから涼しいところで休め、ワガはまた忙しくなるから。』

「太郎はまだ疲れてゐない。餅も割ることが出来るし、何でも出来る。』

「二人は仕事を請求した。一瞬間でも仕事をしないでゐることが苦痛であるやうに見えた。奥野上等兵をみつめる懸命な瞳が、仕事のないことを不安に感じてゐるやうであつた。自分の命が自分のものであるといふ停戦の卑屈な命への執着が、あけすけな哀願の形をとり得ない大人の不器用さでその瞳にあらはれてゐた。

「よし、それではお前等の寝床を作れ。今晚からお前等は我々と一緒に此處で生活をしていけ。』

「私は敵將のすごと／＼歸つてゆく苦悶の姿を思ひ浮べた。最後まで自らを待みおこつた者の當然受けねばならぬ運命のしるしもが投降の拒否となつてあらはれたのである。最後まで戦つてから投降しようといふ戦争への甘い考へが、『戦争の絶対的な厳しさに見事に復讐されたのである。炊事場のあたりをうろ／＼する米飯運兵の、突き離れた孤獨の象徴を私は見たと思つた。』

「六日の夜、豫定の如く第二次の上陸が行はれた。砲軍と大砲も上陸した。コレヒドールも陥ちた。

「その夜、私等は炊事場に下りた。祝ひのビールが私等に配られた。これが最後の野戦料理となるかも知れぬコロッケとせんざいを、ありったけの材料で作つて、私等はビールを飲みかけた。

「私にはお前等がいつか、炊事に残つてゐた注本上等兵に訊ねた。

「太郎と次郎はコレヒドールが陥ちたのをよく知つてゐるか。

「あ、知つてゐるよ、休まずやつてやつた。』

「『どんな氣持でゐる』

「『うん、矢張り悲しいらしい。今日は一日ぼんやりしてゐたよ。』

「私は川べりで分け前のコロッケをほくほくしてゐる二人を呼んだ。

「私は二人をやらせ、ビールを運ぶの重になみ／＼といひやつた。

「飲み。」

「二人はかしくこまつて、別に罪ぢれもせず飲み乾した。私は何も話しかけず、續きさまに二、三杯飲ました。と突然、太郎は私に向つて

「『戦争は終つた、貴方等はこれからどう

脚三人と人さ隊兵

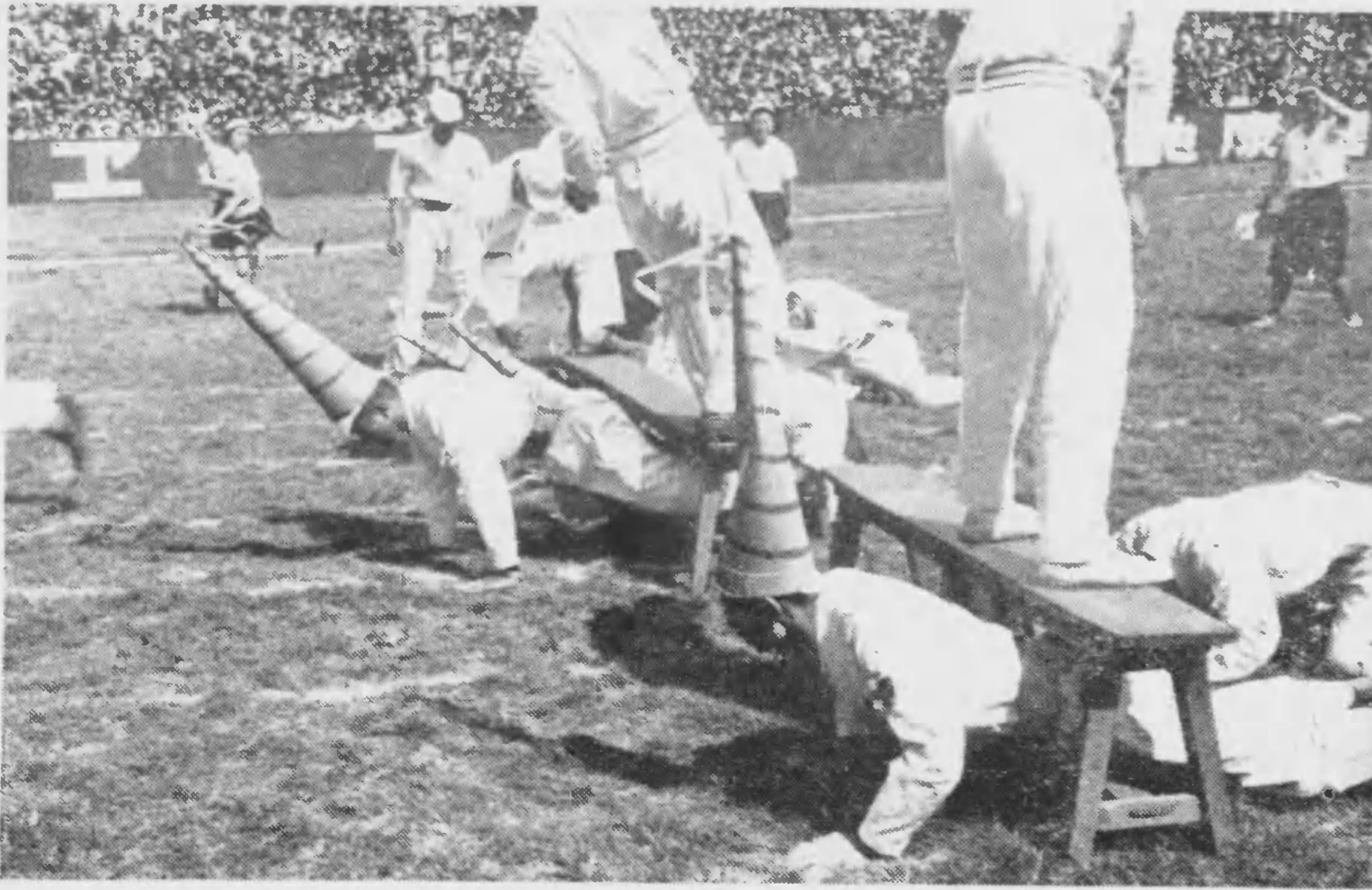
東京 會動運大成錬人軍 傷



軍人援強運動の最終日に
あたる十月八日、多客をきよらに
大強化運動部事務の最後の飾り
「傷残軍人錬成大運動會」が、東
京市、中、軍人援強會、府支部、
古巣後奉公會聯合會の主催、軍
事保護院、東部軍司令部、近衛
師團司令官の後援のもとに小石川
の後樂園スタジアムで華々し
く催された。

この日、府下の各陸軍病院、軍
醫學官、職業指導所などから
せまされた約四千名の勇士たちが
ほか、約六千名の國民學校児童
も参加、秋空のもと、朝やかな
いさにも感動とした體育繪巻を
繰り展げたが、恰も十回目の大
競走最中に奇事に軍國の日に
ふさはしい催しをみせた。

「オ、戦友、早く始め、あと
長い時間か、待て、待て、」
と人々の叫びが空を響かせた。



「二三日経つたら私等はマニラへ歸る」

太郎は次郎と顔を合はせた。

「その暗いランプの光をうけて、その顔が曇ましい失望にくまどられてる」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎は次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」

「太郎と次郎はじつなりのか」



← びん／＼と躍る遊艇にどつどつと
聲があがる。さあ大漁だぞ

→ 今夜は鯉二千尾、それとあつた
本業にはいふまでもない大漁だぞ



それでこの九日、町会の隣組から約六十名の男衆が出勤、地曳網を外濠
に入れて漁獲にあたったところ、目の下尺七、八寸といふ大物も交つて
約一千尾といふ大漁です
町会では早速、生きたまゝの鯉を「白衣勇士の栄養に」と臨時東京第一陸
軍病院に献納し、また市の検査所や病院にも贈りましたが、残りは隣組
の会堂所に配給され、魚類不足の折柄、大變喜ばれました。どうやらこ
の空閑池利用は一石三鳥といふ成功ぶりです
撮影：吉田 英

まづ白衣勇士の食膳に

外濠でとれた鯉二千尾——東京

二 陸軍病院では、舟に上りて寄つてきた勇士たちも見事な鯉に大喜びでした。



空閑池の利用と同時に、空閑池の利用は本誌でもたび／＼お薦めした
ところですが、今日は、この空閑池利用が立派に實を結んでいきい、
鯉がどつさり……といふうれしき話をお傳へ……
ところろは帝都の真中、麹町區九段四丁目地先の外濠です。この一万餘
坪にわたる外濠を常に目先に見てゐる九段四丁目町会では時時、この
まゝ放つておくのも勿體ないと、昨年五月、東京府の水産試験所から譲
り受けた一万尾の二年鯉を放流しました。ところが、最近、網を入れて
みますと、見事な成長ぶり、一尺五寸二百尾以上にもなつてゐます。

十二分間に九十九メートル

縣早岐 會大技競ひな繩



可愛い選手の入場式
頭張れり頭張れり選手



撮影 近藤時夫

× × ×
 儀を締めるにも、荷物を作るにも、物を縛るにも、と考へてくる我々の生活と繩といふものは意外なほどこまかいつながりがあることに気がつくでせう。ことに農村のいろ／＼な作業には繩のもつ使命は重大です。そこで農村各地では雨の日に、冬の夜なべにと、せつせと繩をなひ、この需要を満たしてきてゐます。國民誰



一メートル、二メートル、五メートルと数回する女子選手の手には魚もにじんでくる
 カイツの手に、たこのできた手のひらがカイツばい、つとつとける



でも繩ぐらゐは編むたいいのですが、ことに農村の青少年にとつては一つの大事な問題です
 岐早縣繩業協會ではこのほど縣下各郡の國民學校、男女青年校から繩業の優秀チームを七十二組、百五十名を集めて手廻繩業大會を開催し、いづれも優秀な技能を示しましたが、なかでも個人優賞を獲得した十二歳の豆選手、國民學校初等科の藤井定美君は二十分間に六十九メートルを編みあげました
 美さもよく、編む方もしつかりしてゐなくては——この繩業はどこのどこの買用繩業が決定される

女主人網大増産

茨城



↑ 潮の満ち退きの時、網揚げの女主人。網の網目を直し、魚の身を洗う。少くも多くおくらうと意気だ。

↓ 網の網目を直し、魚の身を洗う。少くも多くおくらうと意気だ。

↑ 洗われるやうに洗い上げられる網々々、やがてこれが五万間、十萬間とのびてゆく。

↓ 一寸私にもこの網でお魚をとってみたいわ、女主人の足にも、夢上にも美しい網の目が...

この秋の国民栄養は秋刀魚でと、大隈を懸想される漁獲期を迎へて、茨城縣那珂湊、平磯、磯崎の三濱では漁網の自給自足をたて、船網株式会社から船網の特許を受けて、この三濱で使ふ漁網四十五万間の製網に二十餘名の乙女達が果敢な作業を續けておます。製網機を踏む足も獅子よく増産されてゆく網に、やがてつつしりと銀鱈が水揚げされることであらう。

「キラキラにあらたわ」



マarseillesのドイツ行船場。右行客船には小さいな乗客の乗組員が海山集つてゐる

定協換交虜俘佛獨

スンラフ

今なほうるさい歐洲第二戦線問題をよそに獨佛協働力はラツアル佛首相の復讐以來、着々効果をあげてゐるか、その一つの例として、このほど二回にわたリフランスの俘虜一千名がドイツから歸つて來た

これはラツアル首相の對獨協働政策としてドイツとの間にとりきめられた俘虜と労働者の交換協定によるものであつて、目下のところ機械工三人について一人の俘虜が解放されることになつてゐる。この運動が展開されるや「我等の俘虜を救へ」は全フランスの國民運動にまで發展し、戦争によつて殆んど大半動かなくなつた金屬工業部門の職工をはじめ、連日全國主要都市の受付事務所に殺到、外電によれば今月末までには約三十万の機械労働者がドイツに送り出され、俘虜十万人が歸還することになつてゐる

このとりきめの成果としてフランスの失業問題は相當解決され、同時に俘虜の歸還によつて農村の労働不足は補充され、獨佛協働を具體的に強化することになつたわけで、歐洲新秩序建設に向つて獨佛の共同歩調は米英の策謀を尻目に、いよゝ正確な足並になつて來たことを示してゐる

官報協會



出發式。マarseillesのサン・シャルル停車場の周りで國旗の空気を一杯にする



その事務所で職員から條件を示される。給與も十分、母國への給金も月二千五百フランまで自由、犯罪の体障も與へられ、まづ進言つてドイツ語を學ばなければ、新しい希望に燃えて勉勵にも精が出る



外地に出むく機械工のために丁寧な身體検査が行はれる

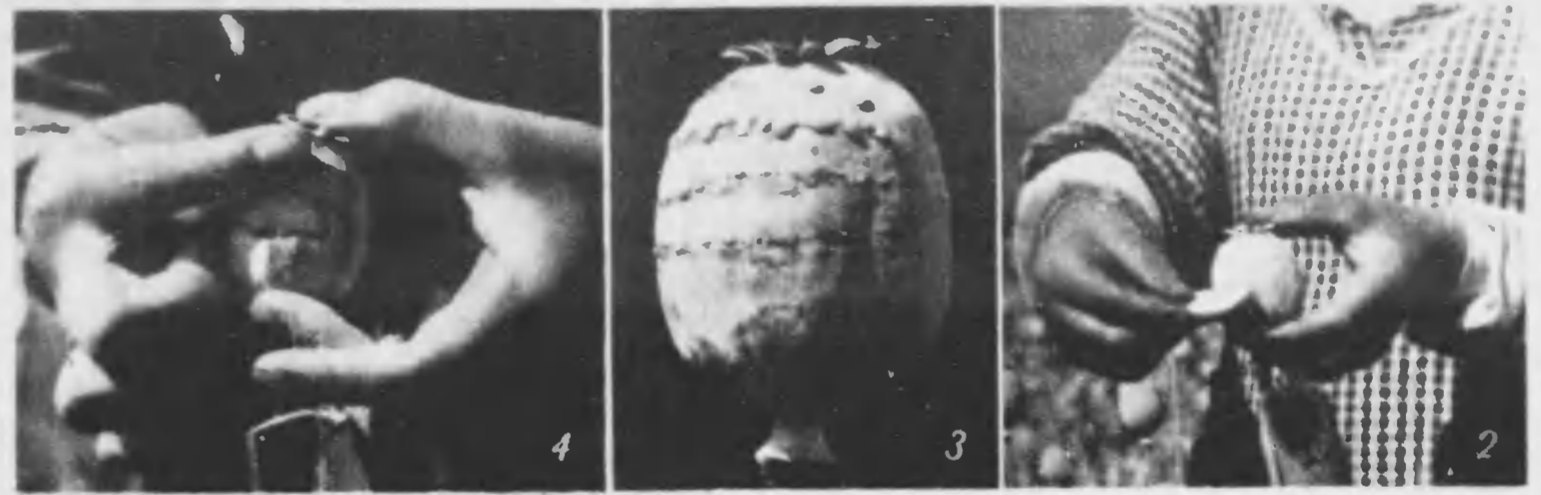


「女代軍はマarseillesを遠征す」さう書いて最後の戰士たちはにきやかに出發した

「夫婦ものも家族もちも、どうぞいらつしやい」ドイツ流の紳なはからひで思ひかけないやうに直し新機行だ



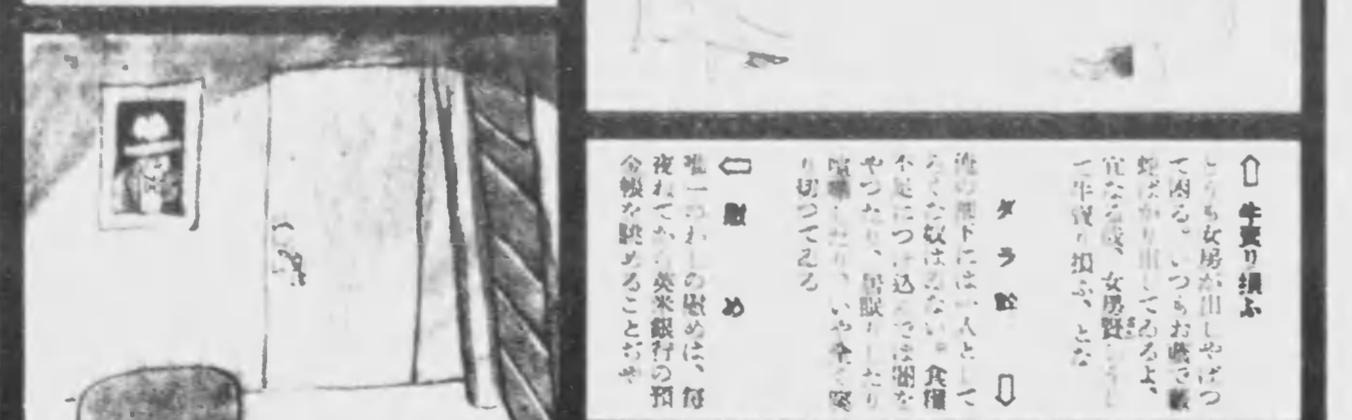
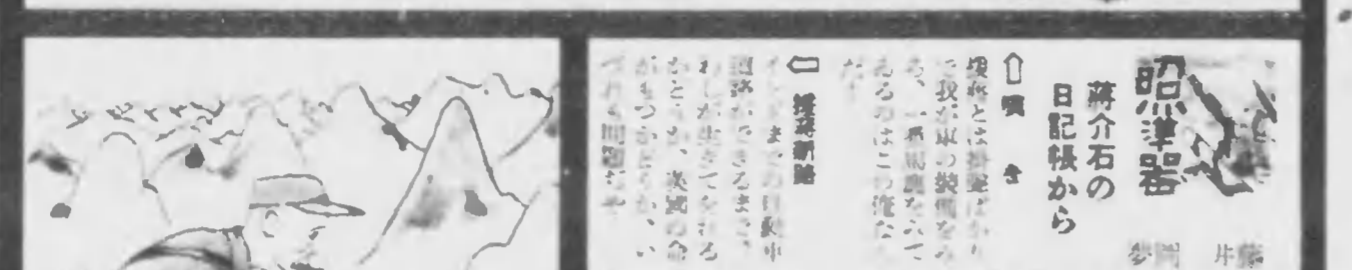
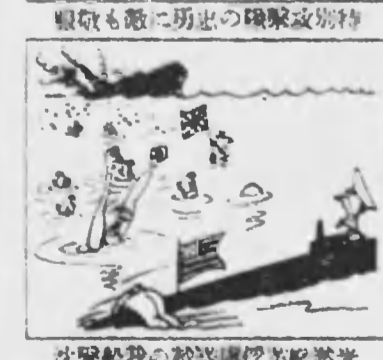
葉用梨、産量の増産



傷痍の勇士の治療に缺くことの出来ない梨、果樹の養分を閉鎖して入内因となつた大梨、国内で増産に努めてゐる。...

復習室 (Review Room) containing 10 numbered questions and answers related to military history or current events.

大東亞戦争漫日誌



昭新器 日記帳から 夢野 井藤

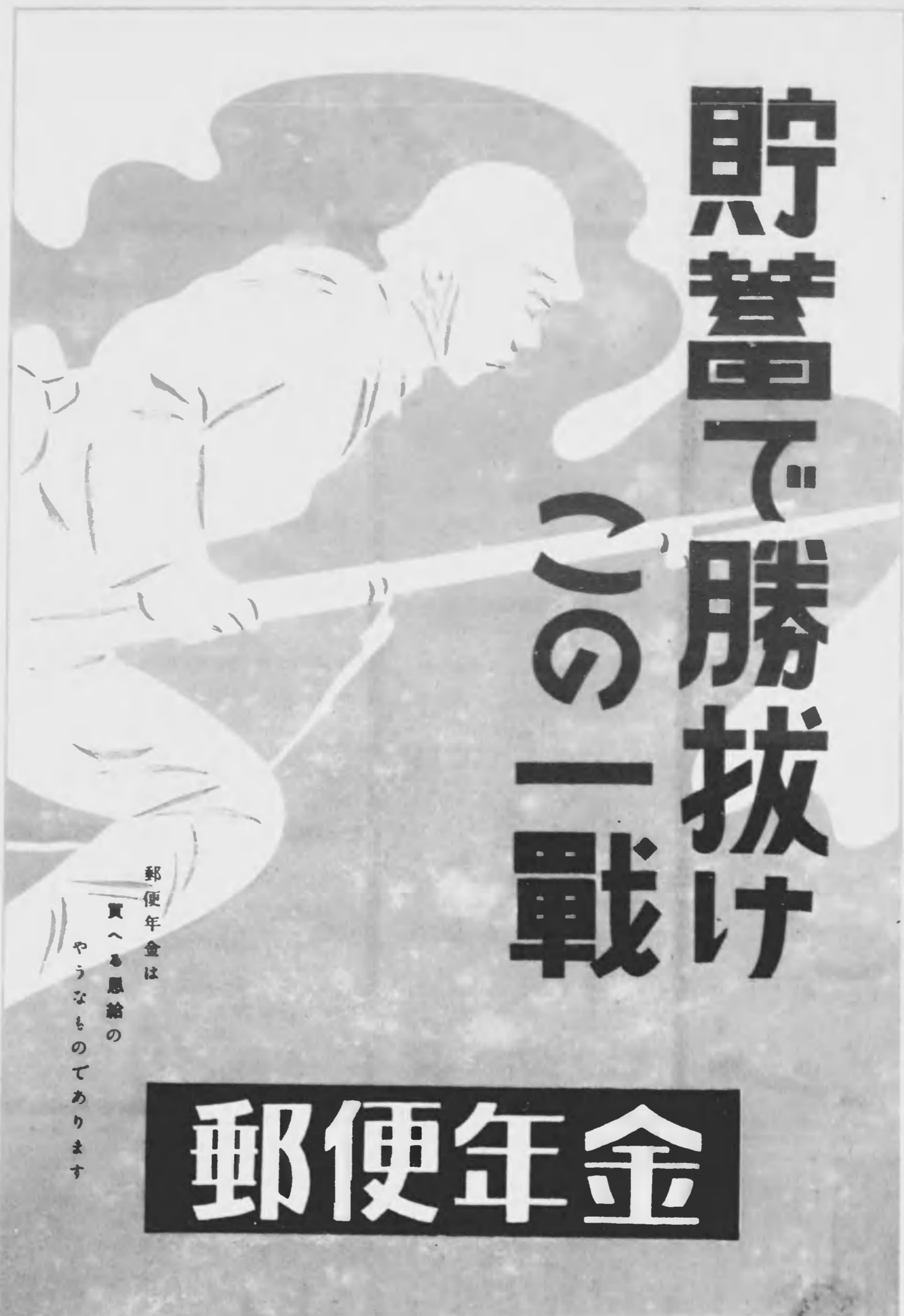
牛取り損ふ... 流石の下には一人として...

おまめ... 準備中の、おまめの、...

★巻紙... 今日海軍は信譽存続。大...

宮真週報 (Miyama Weekly) subscription information, including address, price, and contact details.

真実週報 昭和十七年十月十日 郵政省印刷局印刷 郵政省印刷局印刷 郵政省印刷局印刷



貯蓄で勝抜け

この一戦

郵便年金は

買へる恩給のやうなものであります

郵便年金

内閣印刷局印刷發行

（列強電通・A4紙規定欄はさき大の遺本）